

史実と民間伝承のあいだ

—— 古代社会に早池峰山を開いた一獵師を縁とする交流実現のために ——

立 花 靖 弘

Between Historical Fact and Folklore

—— To realize a good relationship between two cities based on the old stories
that Mt. Hayachine was cleared by a hunter in ancient times ——

Yasuhiro TACHIBANA

The exchange between two cities is going on based on not only historical fact but folklore. This exchange is also important from the point of view of understanding both history and human deeply.

はじめに

いまから1200年ほど前に、静岡県伊豆山で修行した藤蔵^{とうぞう}という名の修験者がいる。実在の人間で獵師である。獵師藤蔵は、岩手県の中央部にある早池峰山を開山したとして、遠野市史に記載されている¹⁾。しかし、その実像を示す文献はほとんどないといってよい。わずかな伝説が加わり伝えられているのみである。

2006年が、獵師藤蔵による早池峰開山と伊豆権現の社（現・伊豆神社および早池峰神社）創建から1200年目になるというので、縁のある遠野市と熱海市との間に交流の芽が出ている。多くの交流契機にみられることであるが、交流の積極的意義を認める立場と、意義を認めない立場とが現れる。意義を認めない立場は、史実の根拠が定かでないこと、昔のことで現代的魅力がないこと、本宮と末社のような関係は全国どこにでもありうることで、ことさら両市の交流に意義があるだろうか、などを主張の拠りどころにする。

本稿は、史実の探求ではなく、たとえあいまいな「史実」と伝説の間にあっても、なお、1200年以上にわたって語られてきた伝承の、それを受けとめる今日的意義と後世に引き継ぐ意味を考える。

1. 問題提起

歴史上の価値を、史実的価値を問うものと、伝承的価値を問うものとに分類した場合、獵師藤蔵にかかわるものがたりは、ここでは後者になるものとしておく。実像のあいまいな獵師藤蔵の存在に伝説が加わり、幾世代もの間伝えられてきた意味を考えてみたい。それは、あたかも溶液中の結晶成長過程に似ている。あいまいで定かでない結晶核を結晶として成長させるのは、その溶液の条件に依存する。伝承の意味を知るためには、それを育て伝えてきた、時代の中の民衆の社会的状況を知ることが必要である。また、そのような社会的状況のなかで民衆の苦しみと託された希望を知

る必要がある。こうした社会背景の理解のなかで美しい結晶となった伝承を通して、民衆の立場からの人間観、歴史観を潜在的に受け継いできたことを想像できるのではないか。

一般に、われわれが学校で学ぶ歴史の教科書は、権力者中心の抗争の歴史であったり、民衆は個性的な顔をもたない存在として描かれるのが通例である。ましてや民衆にかかわる記録性の低い古代社会においてはなおさらである。そこから、人間とは、もともと生存のために争い合う存在であるとか、権謀術数を弄する油断のない存在であるといった人間観が醸し出される。名前をもって歴史上語り伝えられてきた一獮師藤蔵にまつわる物語を通して、人間は共感し信頼しあうことのできる存在であること、そこに民衆の願いを託しつつ歴史をつくってきた存在であることを、ささやかな事例として示そうとおもう。

2. 早池峰山麓の藤蔵碑と子どもの郷土史学習

(1) 岩手県のほぼ中央部に広がる早池峰山、その南麓の山ひだから南の盆地に遠野市のまちがあ

る。その盆地をつきぬけるように、さらに南へ山に向かって車を走らせたところに、目印のバス停があった(図1)。「伊豆権現」の里である。そこからほどなく、伊豆神社の鳥居が見える。その鳥居の傍らに藤蔵碑はあった(図2)。鳥居をくぐって



図2. 藤蔵碑
(「早池峰山開祖 始閣藤蔵碑」)



図1. 伊豆権現の里
(「来内権現」)



図3. 伊豆神社
(「伊豆大権現」)



図4. 伊豆神社御神体獅子頭
左上：獅子頭²⁾ 右下：文化財揭示

薄暗い参道を登ると簡素な神社、伊豆神社がある(図3)。伊豆神社には、伊豆から捧持したとされるご神体の獅子頭が奉納されている。獅子頭は遠野市の有形文化財である(図4)。

(2) 遠野市の小学校では、806年に早池峰神社が早池峰山頂に建てられ、それからふもとに遠野のまちができていったと学んでいる³⁾。中学校になると、早池峰神社を建てたのは狛師藤蔵であると、創建者の名前が登場する⁴⁾。また、早池峰山、六角牛山、石上山の遠野三山信仰にまつわる三女神伝説のなかで、伊豆権現社を三女神と親神の宿った処という伝承として学んでいる⁵⁾。

3. 藤蔵の生きた古代社会

— 藤蔵はなぜ蝦夷の地に行ったか —

藤蔵による早池峰開山は遠野市史によると806年とされる。藤蔵の生まれた年月日も死亡年月日も不明である。いずれにしても800年前後に生存した人間である。藤蔵の実像を想像するために、時代を遡って、影響を与えたであろう7世紀後半からの社会状況を概観しておく。

(1) 伊豆山で修業した藤蔵は、そこで何を体得したのであろうか。また、なぜ遠路蝦夷(ここで

は岩手県)まで行くことにしたのであろうか。そのような彼の思考を知りうる記録はない。古代社会にあって、一民間人に過ぎない存在であってみれば当然とも言えることではあろうか。その思考や動機を、当時の社会状況と伝説から想像するしかない。社会状況からの想像は、彼の思考と行動の説明に対して、「状況証拠」を示すに過ぎないが、一狛師という個人への探求が、時代から遊離した個人の探求へと陥る誤りの危険性を回避させる。

(2) 6世紀から7世紀は、近畿地方を中心に大和政権が国土統一をすすめた時期である。8世紀に入ると大宝律令が完成し、中央集権的な古代国家がほぼ確立しつつあったが、九州や東北など地方によっては、豪族の権限の強いところもあった。大和政権への蝦夷の反乱(780年)などがその例である。大和朝廷の征夷大將軍坂上田村麻呂による胆沢城築城が801年であるから、大宝律令完成(701年)から一世紀を経て、いわば律令政治たてなおしを迫られていた時期に、狛師藤蔵は蝦夷の地に赴いたことになる。

修験者としての藤蔵を考えると、もし、修験という志のなかに、虐げられている人々への救済ということがあるとするなら、大宝律令制下の民衆の暮らしについて若干指摘しておく必要がある。律令制は法治国家をめざすものではあるが、権力者の利益を護るために都合よくつくられた側面がある。法令による税のとりたて、労役の苦しみは、この頃(759年頃)できた万葉集にみることができる。東歌や防人の歌、なかでも山上憶良の「貧窮問答歌」がそれを示す。

(3) 8世紀末の蝦夷の反乱は、こうした大和政権への抵抗という様相がある。この頃、東北地方は部族制社会が高度に発達した社会とされる。部族間の結合がゆるやかな同盟関係にある場合もある。大和政権との交易も行われている。いずれにしても、狩と農耕による部族の生活が大和政権の

強権によって破壊されるときに、そのような支配へのはげしい抵抗となったのである。抵抗は蝦夷に対する政権側の侮辱によっても起こる。栗原郡の地（宮城県北部）の蝦夷の部族長であったアザマロ（伊治公咎麻呂）は、按察使の紀広純と、日ごろ蝦夷を侮蔑していた牡鹿郡（石巻市周辺）の長官の道嶋大楯を殺し、多賀城まで攻め入り落城させた（780年アザマロの乱）。胆沢地方の部族長アテルイ（阿弋流為）副長モレ（母礼）は、政府軍5万人をも撃退するほどの力をもっていたが、802年、これ以上の戦いが部族と村に甚大な損害を与えると、自ら投降した。坂上田村麻呂の処刑反対意見にもかかわらず貴族たちに押し切れ河内国（大阪）で処刑された。

東北の蝦夷のように、統一国家成立前の状態、すなわち連合によって共同の指揮官が部族連合の先頭に立って部族連合を守ろうとした時代を、歴史学では「英雄時代」とよぶ⁶⁾。アテルイはそのような時代の英雄だったとされる。獵師藤蔵は、かくのごとき時代のそのような地域に行ったのである。

つぎに、藤蔵は伊豆山での修行で何を体得したかの想像である。伊豆山は、かつて（700年頃）役行者（えんのぎょうじゃ）の修行場であったという伝説とともに、その後の修験者にとって尊敬の場所であったとされる。藤蔵の内面すなわち信仰上の問題を想像してみたい。

4. 役行者の影響

藤蔵は役行者を尊敬していたにちがいない。このことの推定が、藤蔵の遠野行きの推定につながる。

(1) 役行者は、役小角（えんのおづぬ）の後世の呼び名で、修験道における敬称である。役行者は後に修験道の祖とされる。役小角は実在の人間

で、葛城上郡茅原村で育つ。「続日本紀」（797年成立）「日本霊異記」（822年頃成立）によると、699年に伊豆に配流となり、701年に許され故郷に帰る。その後行方知れず没したとされる。

伊豆配流の理由であるが、続日本紀では、役小角のすぐれた術を妬んだ弟子韓国連広足の讒言によると記されている。続日本紀からおおよそ100年後にできた日本霊異記では、一言主神の讒言によると記されている⁷⁾。韓国連広足から一言主神への変化は何を意味しているのだろうか。

韓国連広足の讒言はいわば弟子による身内の問題になっている。しかし、韓国連広足は、典薬頭という朝廷の官職にまで就いた人物であるから、役小角は朝廷の意に従わなかったという姿勢がうかがえる。それをいっそう鮮明にしたのが一言主神を捕縛し、その讒言にあったという日本霊異記の記述である。役小角が住む葛城は、大和政権の足元であり、一言主神は朝廷の信仰神である。役小角が弟子たちに橋をかけるなどの作業をさせていることを、役小角があやしいことをしているとして讒言されたのである。いずれにしても、役小角はいわば朝廷の意に唯々諾々とは従わず反抗した様子が推定される。

役小角は、術を駆使するため捕まらない。母が囚われたため、役小角は自ら捕縛され、伊豆に流されたのであった。伊豆に配流となった役小角は、現在の地名でいえば、大島、熱海をはじめとする伊豆半島、湯河原、富士山、江ノ島などの地に温泉湧水、開山、修験場の跡を伝説として残した。

(2) 役小角の修行は、衆生救済を目指すためのものであり、そのための自己鍛錬と反骨精神の堅持が避けられなかったのだといえる。宗教現象学者植田重雄は、役行者を「古い曖昧模糊とした伝説上の存在であるが、朝廷にはいつて栄えた奈良仏教とはちがひ、山岳に修行の場を求め、民衆の信仰心を支え、かつ見えない姿で庶民の宗教的向

上につくし、長い間崇拜されてきたのが、役行者である。』⁸⁾(1998年)と評する。役行者が没してから約一世紀を経た9世紀のはじめに、日本霊異記になお熱く語られているその頃、獵師藤蔵は伊豆山で修行したのである。

5. 藤蔵にまつわる二つの伝承

人は、それぞれ学び尊敬する先達を求め、先達を手本としつつ自らの人生を磨いていこうとするのであれば、先達の徳はその人の思想や行為のなかに生き、咀嚼されたその思想や行為は、さらにまた他者に影響し伝達されていくのではないか。藤蔵の実像を想像する試みは、藤蔵が尊敬したと推定する役行者の徳と、藤蔵の行為が影響したと考える他者とのかかわりの写像で推定するのである。この項では後者の伝承の紹介である。

藤蔵の遠野(蝦夷)行きの動機として、役行者の衆生救済と反骨精神の影響を想像するのであるが、それはまた藤蔵の実践を通して他者の共感を呼び起こす。つぎに述べるのはその二つの伝承である。

一つは、早池峰開山にまつわる、遠野市の隣町大^{おおはさま}迫町に伝わる伝説である。大迫の兵部という者が奇妙な鹿を追って山頂にやって来る。同じとき(遠野)来内村の藤蔵もこの奇妙な鹿を追って頂上にやってくる。そこで二人は金色の中に姫大神の姿を見、感涙し、感謝の気持ちで、二人力を合わせてお堂を建て姫大神を奉ったという伝説である⁹⁾。

他の一つは、遠野の伊豆神社由緒書に記されているもので、この神社の獅子頭奉納由来の伝承である。藤蔵が早池峰山を開山し草堂を建てたという話を伝え聞いた「伊豆走湯関係の修験者がはるばる此の地に来て権現の由来を基に獅子頭を御神体として奉ったものである」¹⁰⁾との伝承である。

これらの伝承は、藤蔵を通して、人間が共感する力、共同する力をもっているものであることを示してくれる。役行者も藤蔵も民衆を支配しようとした権力志向者ではない。争いを好まず、衆生救済、弱者救済のために、自己鍛錬の修行を重ね、広く社会に関心をもちつつ、未知の地に挑んだ平和主義者であったといえる。民衆にかんする記録性の薄い古代社会からの想像できるメッセージである。

6. 現代の受けとめ

(1) 歴史を学び現代の課題とむきあう

民俗学者柳田国男が「遠野物語」の第二話に「…大昔に女神あり、三人の娘を伴ひてこの高原に来たり、今の来内村の伊豆権現の社ある処に宿りし夜、…」¹¹⁾と伊豆権現の社を紹介してからでも、ほぼ一世紀が経とうとする。遠野になぜ「伊豆」権現なのかという、素朴な好奇心から、一獵師藤蔵の存在を知り、そのルーツをたどり、伊豆で修行したことを知る。さらに、修行したことが、なぜ遠野(蝦夷)行きに結びついていったのか。そこで、その100年ほど前に伊豆に配流された役小角(役行者)の伝承の影響を推定したのである。配流は政権朝廷にくみしない役行者の姿勢と行動の結果であり、藤蔵の反官的蝦夷行きに何らかの影響を与えたのではないかと推定するのである。

ともかくも、探索の過程で、この二つのまちの遠因が1200年目を迎えようとしていることに出会ったのである。とはいえ、二つのまちの交流実現は、必ずしも順調とばかりとはいえないものであった。実現のためには、いくつもの思想的課題と向きあい克服することが求められた。直面する思想的課題は、それだけ、歴史の見方、人間の見方が混迷のなかであり、平和への希求が鈍感になりつつあり、またその実現の道筋が見えにくく

なっている現状の反映もあるのではないかとさえおもわされるのである。

(2) 坪内逍遙の「役の行者」

獵師藤蔵や役行者にかかわる伝承の現代の受けとめを論ずるにあたり、古代社会から、まず近代社会までくだってみる。1910年代の坪内逍遙の受けとめをみておこう。

逍遙は1916年に戯曲「役の行者」を発表した。「続日本紀」「日本霊異記」を基にした創作である¹²⁾。逍遙の関心事は、封建時代から開国へと向かう日本の転換期において、危機的時代意識をもちつつ、この時代に生きる人間に求められる実践的倫理である。たとえば、今日でも克服されたとはいえない事大主義的思考・思想がある。

逍遙は、戯曲「役の行者」の中で、行者の弟子広足の行為を厳しく叱る場面がある。己の修行の未熟さをわきまえずに起こした失敗、その傲慢で軽薄なところのありように対してである。行者自身も墮落の隙を窺うさまざまな邪心と闘う。

逍遙の実践倫理に求めた理想は、現実の自己変革から遊離したものではなかった。この姿勢は、すでに戯曲「新曲浦島」などでも追求してきたものである。逍遙のこうした現実に立脚した誠実な問題のとらえ方を、植田重雄は、先に紹介した「…朝廷にはいって栄えた奈良仏教とはちがひ、山岳に修行の場を求め、…長い間崇拜されてきたのが、役の行者である。」にさらにこう一行を加えた。

「この行者に逍遙は新しい生命のいぶきを吹き込んだ。」¹³⁾

逍遙は、役行者に託して、時代の転換期における自己の内面の闘うべき姿を表現しようとした。

(3) 怒りの蔵王権現

役行者物語り伝説に登場する蔵王権現の二つの側面を考察する。

「役君形成記」(1684年)なども含めた役行者伝説では、弁財天女、地藏菩薩、蔵王権現が出揃う。役行者が蔵王権現を求めたいきさつを、つぎのように伝える。はじめに現れた弁財天女のような美しい女神の姿では救えない、次に現れた穏やかな慈悲深い姿の地藏菩薩でも救えない、そこで現れた恐ろしい顔をした怒りの蔵王権現の姿こそいま必要なのだという。救うべき対象は、役行者自身と救済を求め苦しむ民衆である。すなわち、蔵王権現の力をもって救済したいのは、自己であり、他者である。生半可な力では救えない悩みが、自己の問題にとどまらないがゆえに、深いのである。

(4) 民衆のなかで逍遙とともに

逍遙が示した内面の自律的自己形成の問題を、他者の存在と不可分に結びつける必要がある。すなわち、内向的探求は外向的探求と一体になったとき、現実の問題解決の真の方向が見えてくるのではないか。民衆、あるいは一般に他者は庇護を受けるだけの受動的な存在ではない。ここでもう一度、獵師藤蔵にまつわる伝説を振り返る。

早池峰開山にまつわる、遠野市の隣町大迫町に伝わる伝説は、鹿を追って山頂にやって来た兵部という者と隣村の藤蔵の二人が、金色の中に姫大神の姿を見、感涙し、感謝の気持ちで、二人力を合わせてお堂を建てて姫大神を奉ったというのであった。ここで、藤蔵の他者とのかかわり方、すなわち、共感し、協働する存在として伝承されていることに留意しておく。

また、遠野の伊豆神社由緒書には、この神社の獅子頭奉納由来についての伝承は、藤蔵が早池峰山を開山し草堂を建てたという話を伝え聞いた「伊豆走湯関係の修験者がはるばる此の地に来て権現の由来を基に獅子頭を御神体として奉ったものである」¹⁴⁾というものであった。すなわち、藤蔵の行為が、他者の共感を呼び起こし支援されたこ

とが記されている。

古代社会からのメッセージとして、人間の能動的で肯定的な人間観を現代に生かすならば、逍遙の内向的自己鍛錬を、こうした能動的な他者あるいは民衆の力と協働する展望のなかで学びとっていくことが求められているのではないか。

(5) アテルイとモレの慰霊碑

本項目「現代の受けとめ」のむすびとして、新聞記事「蝦夷の英雄の慰霊碑建立」にふれる。記事はつぎのように紹介している。「1200年前に朝廷軍の東北侵攻に抵抗した先住民蝦夷の英雄、アテルイとモレの慰霊碑を」住民有志が岩手県水沢市の出羽神社に建立し、約200人が除幕式を行った。式では、大阪府枚方市の二人の首塚とされる土を碑の前に埋めた。建立実行委員会の会長は「郷土愛を持って権力に立ち向かった蝦夷の自主独立の精神を感じてほしい」¹⁵⁾と話したという。

7. 日常の事大主義的俗論を超えて二つのまちの交流実現のために

歴史を学ぶことが、現代の課題にむきあい、その克服の指針とともに未来を展望する力にもなりうるものでありたい。しかしながら、日常活動のなかで投げかけられる「一見もっともらしい」俗論の本質を明らかにし、現代の課題としてとらえなおすことは、必ずしも容易とはいえない。「本宮からみれば、末社は全国に数十社以上ある。なぜ、末社の一つに過ぎないその町と交流するのか」、「なぜ、あえてそれほどの遠方のまちと交流するのか」。

これらの問いには、事大主義の傲慢さが現れている。また、歴史を真迫性をもって想像することも、また、驚きにも似た感動をもって理解することなど到底できない思想のありようを示してい

る。もし、他者理解の思想をもつのであれば、つぎのようにとらえるだろう。末社から見れば、本宮とのかかわりは唯一無二なのだ。また、それを1200年もの間、その関係を誇りとし人々の間に生き伝承してきたことを、感慨深いおもいで理解できるだろう。「それほどに遠方の地」というが、それほどに遠方の地に、当時は命がけでよくも行ったものだ。獅子頭を棒持した者の、おそらくは励ましの、無償の行為などを想像すると胸が熱くなるおもいがするだろう。子どもたちに伝えたいことは、交流のための運賃が高くなる程度の経済効率からしか見るのではなく、1200年の節目を契機に、現代につながる民衆のあゆみ、その歴史観、人間観への学びのいざないこそ求められているのではないかということである。

他者理解の思想は、己の地域文化を理解することにおいても必要であろう。そもそも、ある地域文化を評価する場合、他者、他地域とのかかわりを見ずに、正しい評価をすることなどできるのであろうか。とりわけ質的かかわりを見ることは重要である。本宮と末社のかかわりが、たとえば、権力的強制的な力によってできたものか、あるいは、民衆の自発的献身的な力によってできたものかによって評価は異なってくる。したがって、小さなかかわりであったとしても、そこに示されるリアリティが、かかわりの質を推定することに役立つ。今回の二つのまちのかかわりが、自発的献身的な行為によって実現したものであり、史実と民間伝承のあいだにある、まさにそのリアリティによって、地域文化を真に誇りうるものとして認識することに寄与するに違いないのである。

8. ま と め

わずかな史実を伝説で彩った一獺師についての伝承の今日的意味を考察した。この伝承を縁とし

て二つのまちの交流が起ころうとしている。交流を実現するためには、歴史観の共有が避けられない。伝承を民衆の苦しみや願いを反映したものとみると、伝承の背景にある民衆の苦楽を真に迫るように想像することは、交流を推進するエネルギー源となる。史実と民間伝承の間にある一人の猟師の実像を追い求めながら、引き継ぐべき歴史観と人間観について述べた。

おわりに

今日、世界いたるところで平和を破壊する争いが絶えない。身近な日常生活でも新聞・テレビが伝える寒々とした人間の行為(殺人, 暴行, 詐欺, 侮蔑, 無関心, …)を見せられ続ける。それらは、潜在的な人間への不信感となって底流を流れかねない。日常的な人間不信は、「そもそも人類は恒久平和など築くことはできないのだ」と平和的社会進歩への根強い懐疑心を支える。

そのようなとき、遠く長い歴史の道のりを、「史実」だけではなく、それを伝説で彩って希望を託し伝えてきた無数の人々のおもいを想像することは大切なことではないか。人間は、共感し協力することができ、自己の命をいとおしむと同時に他者のために自己犠牲的に行動することもまたできる。歴史のなかに、そのような民衆の肯定的な人間観をみるためには、学習による想像力の涵養が欠かせない。混迷の現実ではなおさらである。ジョン・レノンの「イマジンは問いかける。人間は、恒久平和を築く力をもっている、そのことを想像してみようじゃないかと。

本稿は、歴史を専門としない筆者に、それとな

く役小角(役行者)を話題にしつつ動機づけてくださった小野博敏教授と、粘り強い文献収集で知的火を絶やさないう見守ってくださった図書館ライブラリーセンター長藤澤みどりさんをはじめスタッフのみなさんのおかげでできたものです。本稿が示そうとした意図にふさわしく、これらの方々との共感を共有しつつ共同作業をさせていただいた気持ちで筆をおくことができる幸せを記し感謝の意とする次第である。

引用・参考文献

引用文献の場合それを明示し、他は参考文献

- 1) 遠野市史編集委員会編「遠野市史」第1巻, 遠野市, 1974年
- 2) 同上書, 引用・写真
- 3) (遠野市) 小学校社会科副読本編集委員会「わたしたちの遠野」遠野市教育委員会, 2004年
- 4) (遠野市) 中学校社会科副読本編集委員会「ふるさと遠野」遠野市教育委員会, 2004年
- 5) 柳田国男「遠野物語 山の人生」岩波書店, 1991年
柳田国男「遠野物語 付・遠野物語拾遺」角川書店, 2004年
- 6) 工藤雅樹「古代蝦夷」吉川弘文館, 2000年
工藤雅樹「古代蝦夷の英雄時代」新日本新書, 2000年
- 7) 宮家 準「役行者と修験道の歴史」吉川弘文館, 2004年
- 8) 植田重雄「坪内逍遙 文人の世界」恒文社, 1998年, 引用・p. 139
- 9) 大迫町教育委員会編「早池峰草紙 おおはさまの伝説」大迫町教育委員会, 1993年
- 10) 菊池展明「エミシの国の女紳」風琳堂, 2003年, 引用・p. 42
- 11) 上掲書5) 引用・第二話
- 12) 坪内逍遙「役の行者」岩波書店, 1992年
- 13) 上掲書8) 引用・p. 139
- 14) 上掲書10) 引用・p. 42
- 15) 日本経済新聞, 2005年9月18日付記事, 引用